

エリザベス朝後期における、アングリカン・チャーチ体制と文化：大学才人を中心に

著者	佐野 ？弥
著者別名	SANO TAKAYA
発行年	2011
その他のタイトル	A Study of the Anglican Church and Elizabethan Culture with Special Reference to the University Wits
URL	http://hdl.handle.net/2241/115192

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520207

研究課題名（和文） エリザベス朝後期における、アングリカン・チャーチ体制と文化——大学才人を中心に

研究課題名（英文） A Study of the Anglican Church and Elizabethan Culture with Special Reference to the University Wits

研究代表者

佐野 隆弥 (SANO TAKAYA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：90196296

研究成果の概要（和文）：大学才人が1580年代後半から1590年代前半にかけて生成・発展させた演劇文化の状況を、歴史的・政治的・宗教的コンテキストにおいて調査分析し、エリザベス朝後期における演劇文化とアングリカン・チャーチ体制との関係を実証的に記述した。取り分け、大学才人の中でも、アングリカン・チャーチ体制との繋がりが緊密だと考えられる3人の劇作家——ジョージ・ピール、アンソニー・マンディ、トマス・ナッシュ——に焦点を絞り、彼等の劇作の有り様に影響を与えた宗教的側面の特徴を具体的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study explores the influences the Anglican Church exerted on the Elizabethan drama from the late 1580s to the early 1590s. It also investigates how the University Wits (in particular, George Peele, Anthony Munday, and Thomas Nashe who all seem to have many connections in the Anglican Church) generated and developed the Elizabethan drama engaging in serious negotiations with the Anglican Church through analysis of their dramatic texts and prose works. This study is conducted as part of a broader research project of mine which seeks to describe a wide variety of cultural activities of the University Wits.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：エリザベス朝、アングリカン・チャーチ体制、プロテスタント、カトリック的偶像崇拜、聖史劇、George Peele、Anthony Munday、Thomas Nashe

1. 研究開始当初の背景

エリザベス朝後期における宗教と文化・演劇については、古くは E. K. Chambers、George H. George、Joan Simon など、近年では Christopher Haigh、Patrick Collinson、Paul Whitfield White、Alan Sinfield、Tracey Hill などの先行研究が多数存在する。わが国

でも、「大学才人研究会」を中心に研究が行われている。しかし、このような先人たちの浩瀚な研究成果にもかかわらず、1580年代・90年代イングランドにおける、文化・演劇産出と宗教の関係については不分明の点が多く残っており、エリザベス朝演劇研究者の理解も十分とは言えない。本研究は、先行研究

を包括的に再検討した上で、George Peele、Anthony Munday、Thomas Nashe 3名の University Wits を主軸に、この 21 世紀において適切なエリザベス朝文化史の構築を試み、実証的に構築されたエリザベス朝文化史を通しての、宗教と文化の動態解明を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1580 年代・90 年代イングランドにおける、アングリカン・チャーチ体制と、演劇を中心とした文化のせめぎ合いを実証的に調査分析した上で記述することであり、取り分け、「大学才人」(University Wits) と呼ばれる劇作家や文筆家に注目し、彼等の政治・宗教的位置と、演劇・文筆活動の関係を探求し、併せて、本研究の調査で得られた知見に立脚して、George Peele、Anthony Munday、Thomas Nashe の主要な戯曲と散文作品を検証し、テキストの特質を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) エリザベス朝後期の宗教改革関連の状況を詳細に調査し、記述する。国教会関連資料、政府・枢密院資料、皇室庁令その他の歴史資料を精査し、この間の経緯を検証し、アングリカン・チャーチ体制の変遷を歴史的に跡付ける。その上で、宗教状況と演劇を中心とした文化状況の関係について調査する。そして上記 2 点の分析を踏まえて、George Peele の業績——取り分け、イングランド最後の聖書劇と言われる *David and Bethsabe* ——を検討し、演劇が聖書に取材することは不可能となっていたプロテスタント的の反演劇主義の流れの中で、何故本劇の創作が可能であったのかを考察する。

(2) 劇作家、散文作家、パンフレット作者といった多面的な顔を持ち、この時代のジャーナリズムで最も成功した文筆家の一人であった Anthony Munday は、同時に、反カトリック的な情報収集家という政治的・宗教的な側面も有し、彼の文筆業と政治的立場はきわめて密接に係わっている。こうした興味深い位置にいる Munday の政治的経歴の調査検証を主軸にして彼の著作物を分析し、それらの同時代文化への影響を解明する。

(3) Thomas Nashe の本質的特徴とも言える諷刺は、この時期、政治・宗教と一体化した上で成立していたジャンルであり、その意味で Nashe はもともと政治的に尖鋭な人物であった。この Nashe が、ピューリタンによって引き起こされたと考えられているマーティン・マープレット論争の中で、いかに振る舞ったかを検証しながら、この宗教論争が同時代文化に及ぼした効果と影響を解明する。

4. 研究成果

2008 年度～2010 年度の 3 年間に 1 件の原著論文、1 件の共著書、2 件の書評を刊行し、4 件の口頭発表を行った。研究成果の概要を以下に述べる。

(1) 原著論文 (単著)

① 「Anthony Munday, *The Downfall of Robert, Earl of Huntingdon* における政治的言説」(2010 年 2 月)

Anthony Munday の *The Downfall of Robert, Earl of Huntingdon* は、劇構造の破綻とメッセージの過小さ故、従来低い評価に甘んじてきた。本論は、本劇の見落とされていた政治的言説に焦点を合わせることにより、本劇を含む *The Huntingdon Plays* や Munday の再評価を試みるものである。

Downfall 劇に政治的言説という補助線の導入を行った理由は政治意識の強い Munday が本劇にもその意識の痕跡を残しているのではないかという仮説を立てた上で、そのような仮説が従来十分に検証されて来なかったということに尽きる。

Downfall 劇の枠組みは、Henry VIII の御前で上演される芝居の練習を行うという体裁を取っている。時代設定は、Richard I の十字軍遠征中に、王の弟 Prince John が王位篡奪を企てるところに置かれている。本劇のアクションは、Richard I が国政を Ily 司教に託し、十字軍の遠征に旅立ったあとの時点から開始され、主人公である Huntingdon 伯爵 Robert は、Fitzwater 卿の娘 Matilda との婚礼の祝宴を開いている最中に、執事と伯爵の伯父である York 修道院長の共謀により社会的破産者の宣告を受け、アウトローとなった伯爵は、シャーウッドの森で隠棲する。そこに、ドラマの終盤で、伯爵の政敵であった Ily 司教や Prince John などが失脚して逃げ込んで来るが、大団円に登場した Richard I の許しによって目出度く幕となる。

Downfall 劇における政治的側面で留意すべき言説は 3 点存在する：(1) John Skelton という人物の活用、(2) シャーウッドの森を中心としたパストラル的世界の設定、(3) Prince John (あるいは King John) の領有のされ方。第 1 の点、Skelton の活用に関しては、Skelton が語る社会諷刺のバラッドが重要である。インダクションの枠を越えた Skelton の動きは、極めてメタシアトリカルであり、一貫した劇的イリュージョンを阻害するこうした結構は、本劇の評価を下げる要因の一つとなっていることは確かだが、同時に、ドラマの有機的一貫性を犠牲にしてまでも提示される Skelton の振る舞いは、辛辣な諷刺やスケルトニカルと呼ばれる独特の詩形とも相まって、鮮明な印象を観客に与える。結果的には、Friar Tuck の裏面に諷刺家の

Skelton を貼り付けることで、カトリックの他者化が図られることになる。第2の点、パストラル的側面に関してだが、パストラルというジャンルが、初期近代イングランドにおける政治的アレゴリーであったことはよく知られている。本劇では伯爵から経済的・法的・政治的権力を奪う人物たちは、すべて教会関係者あるいはそれと結託した勢力であり、パストラルの基本的対峙構造である国王と廷臣の関係は、本劇の場合、カトリック勢力と伯爵の対峙へと移項されていて、観客の感情移入は反カトリック的方向に注がれることになる。第3の点、Johnの表象に関してだが、本劇でのJohnの振る舞いはすべて、Johnの権力欲を表しており、権力闘争におけるJohnの専横ぶりが、明らかに否定的意味付けを伴って描かれていることが、特徴と言ってよい。そして大団円における、Johnの政治上の非道ぶりと教会勢力の伯爵に対する非道ぶりと、観客の意識における最終的な重ね合わせが、カトリックに対する否定的意味の生成に与っている。

(2) 著書 (共著)

①『『ダビデとバト・シェバ』——1590年代の聖書劇をめぐる——』、(『英米文学の可能性』所収) (2010年3月)

本論では、George Peeleの『ダビデとバト・シェバ』を取り上げ、戯曲全体を貫く中心的な構造と主題の在処をPeeleの他作品との関連を中心に検証し、その上で、1590年代を中心とした聖書劇の創作と上演の調査を通して、聖書劇としての『ダビデとバト・シェバ』の演劇史における位置付けと意味の探求を試みた。

『ダビデとバト・シェバ』論の多くは、作中に描出された、ダビデを中心とするポリテイクスに焦点を合わせてきたが、この現象は、Peeleが材源である旧約聖書を基本的には忠実に再現してきたこととも無関係ではないであろう。

『ダビデとバト・シェバ』の作品論は、ダビデを中心に展開される政治劇的な部分と、アブサロム(特にその黄金の髪)を軸に描き出される部分の、二点に注目してきた。イスラエル王国の政治中枢の動揺と内乱、その収束を通しての権謀術数的政治観の提示という展開を見れば、本劇の中心軸が政治劇であることに疑いを入れない訳だが、しかし、より詳細に本劇の特徴を検証してみるならば——具体的には、Peeleの本劇と、彼が利用したと考えられる旧約聖書の「サムエル記」・「列王記」・「詩篇」とを比較対照させてみるならば——、Peeleが意図した劇作の主要な変更点が、ダビデの“humanization”であり、軍司令官ヨアブの一層の冷徹な政治化であり、そしてアブサロムの機能拡大、の三点

であったことが判明する。

アングリカン・チャーチ体制の整備と確立が進展するにつれ、カトリック的偶像崇拜の意味を負わされた聖史劇の上演が徐々に減少し、エリザベス一世即位後の20年間を経て、1580年代には多くの都市や地域で、聖史劇の上演が途絶えてしまったことはよく知られている。しかし、その一方で、例えばケンダルやプレストンという街では、1603年まで聖史劇が上演されたという記録が存在し、他の都市においても1580年以降何度か聖史劇の復活が試みられていた。実際、14世紀の後半から200年にわたって存続してきた聖史劇が、文字通り表舞台から姿を消したとしても、イングランド人のメンタリティに浸透した聖史劇をめぐる記憶が、一つの地下水脈として、彼等の文化的反応を規定するファクターとして、1580年代や90年代には根強く存在し続けたと考えることは、妥当性を有する判断だと思われる。

こうした聖史劇消滅の流れの中で、商業演劇の世界では、聖書に取材した戯曲「聖書劇」がいくつか創作されているが、その大半が失われているため、『ダビデとバト・シェバ』は『ロンドンとイングランドの鏡』と並んで貴重な現存作品と言われなければならない。アングリカン・チャーチ体制による抑圧と聖史劇をめぐる記憶とのせめぎ合い、聖書劇が聖史劇とどのような連関を有する存在であるのか、などは微妙な問題であり、聖書劇自体が散逸しているため、実証的に検証することが困難な問題ともなっている。

およそ30年間で14本しか創作されなかった聖書劇が、世紀の変わり目前後にその半数以上が上演されるという現象の背後には、実際、劇作を取り巻く外からの事情があったのかも知れない。しかし、同時に、われわれとしては、それだけの数の戯曲が聖書に取材することが可能であった、という事実にも注目しておく必要がある。『ダビデとバト・シェバ』に限ってみても、上演もされ、また書籍出版業組合記録に登録された上で出版もされているところから見れば、宗教関係者の検閲を受けている可能性も否定できない。こうした、聖書に取材することの困難さの問題は、一つの仮説として、原理原則的なものではなく、上演検閲の場合同様、プラグマティックな側面を有する問題であった、つまり取材対象の題材の問題もさることながら、内容処理の比重もかなりあったのではないかと考えることができるであろう。

(3) 書評 (すべて単著)

① Tracey Hill, *Anthony Munday and Civic Culture: Theatre, History and Power in Early Modern London 1580-1633* (Manchester: Manchester UP, 2004) (2008

年9月)

初期近代ロンドンのあらゆる文化シーンの周縁に顔をのぞかせる Anthony Munday は、その遍在性並びに偏在性故に「三文文士」との評価にも甘んじてきたが、本書を含め近年連続して研究書が上梓された。Munday への関心の復活は、彼のユビキタスの存在が担っていた役割の解明へ向けての動きとして、単に広義のエリザベス朝演劇研究への貢献のみならず、初期近代ロンドン文化探究の面からも、大いに歓迎されるべき現象である。Hill による本書は、後述するように、“civic”を一つのキーワードとして Munday とロンドン市との多層的相互作用を描き出すことを眼目とするが、同時に、キャノンの圏外に置かれてきた Munday とそのテキストの再発掘を通して、Munday を初期近代ロンドン文化の諸要素の交差点に位置付ける試みでもある。Munday のキャリア形成とその過程で産出されたテキストの探求だけでなく、それを可能にした諸条件の記述をも見据えることが、本書の仕事となる。

Hill の関心は、Munday の活動を取り巻く環境、取り分けその実証的な相へと向かうことになる。Hill が「地図制作的手法」や「地誌記述」あるいは「文学的地理学」と呼ぶアプローチは、Munday がたどった文字通りの足跡を追跡調査しようとする彼女の意図と呼応するものであり、本書の随所で確実な成果を生んでいる。Munday の教区教会の分析に代表される、この種の Hill の問題提起が、第1章以降で詳述される Munday のキャリアと、ロンドン市と、演劇をめぐる問題系へと展開されてゆく。結局のところ、Hill の描き出す Munday 像とは、こうした地理的・共同体的・商業的空間の境界を実利的に越境してゆく存在であり、また同時にこれらを繋ぐ結節点でもあるのである。

Munday のキャリア形成は、1576年、書籍商 John Alde の下での徒弟修業から開始されるが、2年後の1578年、徒弟奉公を完了させることなく、彼は大陸の神学校に姿を現す。第2章が扱うのは、この1570年代後半から80年代にかけての、Munday の文士としての自己成型である。Munday が「仮面」や「腹話術」などの技巧を用い、意図的に「作者」としての自己の存在を隠蔽あるいは分散化し、そのような操作を通してロンドンの文化的市場での自己の流通価値を高める——という Hill の分析は多分に魅力的なものとなっている。

Munday の多面的後援戦略に変化が生じ、ロンドン市との関係が深化してゆく様相を扱うのが第3章である。Hill によれば、Munday のこの方向転換は、貴族や宮廷に比べて、ロンドン市がスポンサーとしてはるかに安定しているからということになる。続く

第4章では、1580年代・90年代の Munday の役者・劇作家としてのキャリアと1600年のフォーチュン座建設の意義が、議論の中心となる。演劇の統制と統制による利権確保という図式で、1580年代の宮廷と市当局の拮抗を捉える Hill は、同じ80年代における Munday の矛盾するかに見える振る舞いをその延長線上に置き、Munday の生き残り戦略として評価する。

17世紀になり、Munday のロンドン市の歴史と伝統に対する傾斜は鮮明になる。市長就任バジェントや Stow の *A Survey of London* の修正版を材料に、Munday のこうした様相を地誌記述的アプローチから解き明かそうとするのが、最終章第5章である。Munday のロンドン市への肩入れを主張していて、分量的にも内容面からも本書の中で最も読み応えのある箇所である。多面的で捉まえがたい Munday を土地と空間という位相から絡め取り、Munday その人と彼の文筆活動が残した軌跡を、鳥瞰図的に描き出そうとする Hill の分析法は、この最終章において一つの成果を生んでおり、Munday 研究に確かな貢献をしている。

② Tiffany Stern, *Documents of Performance in Early Modern England* (Cambridge: Cambridge UP, 2009) (2011年3月)

初期近代演劇には、注目されながらも十分解明されてこなかった事象が存在する。例えば、レパートリー・システムの演目ほどのようにロンドン市民に宣伝されたのか、プロローグを有する戯曲とそうでない戯曲が存在するのは何故か、などである。Stern による本書は、初期近代劇のテキストが様々な文書という部分から構成される「継ぎ接ぎ」構造を有するものであるという前提に立って、こうした現象の解明を試みた研究書である。

本書の分析の対象は、以下の3点において極めて物理的なものであると言える：(1)調査対象の資料は、シナリオ原本、ピラ、粗筋表、役者登場一覧などの大量の文書である；(2)上演用台本と印刷戯曲は別個の存在で、初期近代劇の理解には前者が重要である；(3)一つの戯曲に対する数種類の「本」は、上演の各段階を反映している。Stern のこうした姿勢は、初期近代劇の台本が、異なった人の手により、異なった時期に、異なった流通を経た様々な文書から構成されているという考えに由来している。

本書は8章仕立てで編成されているが、内容面からは3分割することが可能で、第1部はシナリオ原本、ピラ、粗筋表等の上演以前に関わる文書を扱っている。第2部は、プロローグやエピローグ、戯曲に挿入された歌曲、役者が舞台上に持ち出す小道具としての巻

物など、戯曲本体と分離可能な文書を分析している。第3部では、役者登場一覧や役柄毎の台詞抜き書き帳などの、主として楽屋内に関わる文書を検証している。

Stern は前著 *Shakespeare in Parts*(2007) で、Shakespeare 劇における役柄毎の台詞抜き書き帳やキューの分析記述を行ったが、本書はこの前著の拡大版と考えてよい。本書に改善点を求めるとすれば、以下の5点になるだろう：(1)「テキスト」や「作者」といった重要な用語に明確な定義が欠けている；(2)本書で言及される様々な文書の写真が全く掲載されていない；(3)各章の編成が時代順になっていない；(4)本書全体を俯瞰する記述が用意されていない；(5)本書の議論を通してプロンプターおよびプロンプターが使用する台本の重要性が浮上してくるので、これらに関する独立した記述が存在するとよい。しかしながら、Stern の本書は、大量の啓発的な資料を使用した、洞察に満ちた、一読するに値する優れた研究書であると評価できる。

(4) 口頭発表 (すべて単独)

①「Peele's *David and Bethsabe*——1590年代の聖書劇をめぐって」(2008年10月)

著書『『ダビデとバト・シェバ』——1590年代の聖書劇をめぐって——』、『英米文学の可能性』所収(2010年3月)に同じ。

②「Anthony Munday, *The Downfall of Robert, Earl of Huntingdon*における政治的言説をめぐって」(2009年6月)

原著論文「Anthony Munday, *The Downfall of Robert, Earl of Huntingdon*における政治的言説」(2010年2月)に同じ。

③「Thomas Nashe, *Summer's Last Will and Testament*における反知性主義」(2010年10月)

Summer's Last Will and Testament (以下、*Summer's Last Will*と略称)は、Nashe 唯一の現存上演用単独作ということになるが、この戯曲の先行研究においては、その限定された上演環境を考慮することが、作品解釈の重要な鍵と考えられてきた。その詳細は次の通りで、1592年の秋、ロンドンではペストが猖獗を極めており、その猛威を逃れるべく、時のカンタベリー大主教 John Whitgift はクロイドンの屋敷に逗留し、その無聊を慰めるべく、当時 Whitgift の庇護を受けていた Nashe が書き上げたのが本作品である。Whitgift と Nashe の繋がり、ピューリタン抑圧政策を取っていた Whitgift に反発して発生したとされる、Martin Marprelate 論争の際、Nashe が国教会側の書き手として動員されたことに因む、と通常説明されている

が、では、そのような作劇・上演環境のもとで創作された *Summer's Last Will* とは、どのような特色や意味を有する作品であるのかを、以下に検証する。

本劇の中心的なテーマは、一種の王位継承もしくは遺産相続である。疫病に罹患し死に直面した君主の<夏>が、臣下の中から後継者あるいは相続人を決定するために、順次御前に召喚し会計報告を要請する。その際の<夏>と臣下のやり取りが、この作品のプロットそのものとなっている。結局、臣下の中に相応しい相続人を見つけることができなかつた<夏>は、<秋>を後継者に指名し王冠を譲渡しようとするが、この後継者の指名に<冬>は激しく反発し、その結果<夏>は<冬>を<秋>の財産管理職に任命し、<冬>もその措置に満足するのだが、今度は逆に<秋>がこの措置を不服とし、<冬>が貧困の原因であることを非難し、<冬>の2人の息子の食欲さとホスピタリティ精神の欠如を攻撃する。そこでこの両名が<夏>の御前に順次召喚され、彼等は<夏>から祝祭と歓待を維持するよう命じられたり、追放・監禁の命を受けることになる。最後に<夏>が遺言の実行を<秋>と<冬>に託し、サテュロスと森のニンフに連れ去られて退場となる。

Summer's Last Will がこうした結構を有することから、この出し物は、C. L. Barber が本作品の祝祭を主題とした論争詩的・審判劇的余興性に注目して以来、祝祭と反祝祭の対立構図のうちに、その意味の解明を試みる努力が継続されてきた。またその延長線上に、祝祭の中心的精神であるホスピタリティをめぐる言説を読み取る研究も存在する。本発表は、*Summer's Last Will* が祝祭やその精神を軸に展開されるショーであることに、異論を唱えるものではない。しかし、本劇には、祝祭性以外にも重要な「主題面」での構成要素が存在することは見逃されてきた。それが反知性主義の言説であり、本発表は、本劇における当該言説の有り様を検証すると共に、その言説と祝祭性の折り合いを分析することを目的としている。

Summer's Last Will における反知性主義言説の最大のもは、<夏>が<秋>を後継者に指名し、<冬>がそれに激昂する場面で展開されるものである。この<冬>の学問知性非難において注目しておきたいのが、<秋>への非難がどのような形で反知性主義と接続されているのか、そこには何がしかの本質的な連想が機能しているのか、という問題である。そしてこの<秋>への非難と反知性主義言説との連想は、恣意性の極めて高い状態でなされていることが判明する。Nashe は、かなり強引な形で学者への非難を持ち込み、しかも長口舌でそれを展開して見せる。さらに、この反知性主義言説を Nashe は、本作品

の転換点とも言うべき箇所に据え、アクションの旋回軸としての機能を付与していると考えられる。本劇の構造は、祝祭と反祝祭の対立構図を特徴とする前半部と、＜冬＞の2人の息子の召喚尋問を通して浮き彫りにされる、ホスピタリティ精神の維持を訴える後半部という形で、確かに主題面では二分されている訳だが、反知性主義言説はこの両者をつなぎ合わせ、本作品の最終的メッセージの生成へ向けて、貴重な橋渡しとなっている。

では、＜冬＞に反知性主義の言説を延々と語らせる Nashe の意図とは何なのであろうか。Nashe の *Pierce Penilesse* を分析の一助として検証すれば、以下のようになる：＜冬＞による学問への非難や反知性主義言説の展開は、すべての学問を統括し、またすべての学問の中心に位置付けられる詩に対する非難へとつながり、その詩の仇とはカルヴァン思想の説教者ということであってみれば、＜冬＞の反知性主義とは結局のところ、ピューリタニズムによる攻撃というニュアンスを、Nashe においては、帯びることになる。

Summer's Last Will の最終的メッセージが、ホスピタリティ精神の維持の強調であり、そしてその主張が Whitgift へと向けられたものであり、さらに＜冬＞による学問非難が、ピューリタニズムによる攻撃を表象するものであり、その上で Nashe と Whitgift を結び付ける契機となったものが、Martin Marprelate 論争であったことを想起するならば、＜冬＞の反知性主義言説には、かつての（そして今現在の）共通の敵ピューリタンの喚起と非難を通して、パトロンへの愛顧あるいは愛顧の存続を、搦め手から訴求する Nashe の姿が控えている、と解釈することが可能なのではないかと考えられる。

④「ナッシュ作品におけるコルネリウス・アグリッパの処理について——ピューリタニズムとの関連を中心に」（2011年1月）

口頭発表「Thomas Nashe, *Summer's Last Will and Testament* における反知性主義」において、＜冬＞による反知性主義言説の長口上を語らせる Nashe の意図を検証する際、ルネサンス期の哲学者で、新プラトン主義神秘思想家の Agrippa による、近世懐疑論の先駆けをなす『学問の不確かさと空虚について』に言及した。本発表では、Nashe のより多くの散文作品を調査対象とし、それらにおける Agrippa の領有を考察した。その結果、Nashe が Agrippa 自身のことを「すべての学問に罵声を浴びせる者」と捉え、その上で Nashe の思考においては、Agrippa に代表される反知性主義者がピューリタニズムと重ね合わされていることを確認した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

(1) 佐野隆弥、Anthony Munday, *The Downfall of Robert, Earl of Huntingdon* における政治的言説、『筑波イギリス文学』（筑波イギリス文学会）、査読無、第12巻、pp. 17-31、2010年2月。

〔学会発表〕（計4件）

(1) 佐野隆弥、ナッシュ作品におけるコルネリウス・アグリッパの処理について——ピューリタニズムとの関連を中心に、第4回エリザベス朝研究会、2011年1月29日、慶應義塾大学。

(2) 佐野隆弥、Thomas Nashe, *Summer's Last Will and Testament* における反知性主義、第49回シェイクスピア学会、2010年10月16日、福岡女学院大学。

(3) 佐野隆弥、Anthony Munday, *The Downfall of Robert, Earl of Huntingdon* における政治的言説をめぐって、関西シェイクスピア研究会2009年6月例会、2009年6月28日、大阪大学。

(4) 佐野隆弥、Peele's *David and Bethsabe*——1590年代の聖書劇をめぐって、第47回シェイクスピア学会、2008年10月11日、岩手県立大学。

〔図書〕（計1件）

(1) 玉井暉、佐野隆弥他70名共著、『英米文学の可能性』、英宝社、2010年、879頁。佐野担当、『『ダビデとバト・シェバ』——1590年代の聖書劇をめぐって——』、pp. 179-89。

〔その他〕

〔書評〕（計2件）

(1) 佐野隆弥、Tiffany Stern, *Documents of Performance in Early Modern England* (Cambridge: Cambridge UP, 2009).

Shakespeare Studies (The Shakespeare Society of Japan)、査読有、Vol.48、pp. 49-52、2011年3月。

(2) 佐野隆弥、Tracey Hill, *Anthony Munday and Civic Culture: Theatre, History and Power in Early Modern London 1580-1633* (Manchester: Manchester UP, 2004).

Shakespeare News (日本シェイクスピア協会)、査読有、Vol.48, No.1、pp. 49-52、2008年9月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 隆弥 (SANO TAKAYA)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所・教授

研究者番号：90196296